

北部地域 療育センターだより

第15号

センターだより第15号発行にあたって

北部地域療育センター所長 今枝 正行

療育センターは保育士、指導員、心理士、ケースワーカー、そして、保健師などの医療スタッフなどの多職種から成ります。今回のセンターだより第15号は、こういったスタッフのそれぞれの立場からの実践紹介を通して、療育の現場でわれわれが大切にしていることをお伝えしたいと思います。

先日のセンターでの保護者との懇談会で「合理的配慮」をテーマにお話した時のことです。「それ（合理的配慮）は今まで『寄り添う』という言葉で言い表してきたことですね」と応じて下さったお母さんがおられました。「支援する、される、障害がある、ない」という枠組みを越え、包み込む温かさを感じました。療育の現場で、われわれは、多くの親御さんから大切なことを教えていただいておりますが、そんな出来事のひとつでした。

さて、2020年は世界中が新型コロナウイルス感染拡大に立ち向かっている最中です。人は不安な時、寄り添って絆を求めますが、フィジカルディスタンス※が必要と

される現状は、われわれが大切にしている向かい合うことを難しくしています。しかし日常生活の大きな変化を余儀なくされている現在の状況だからこそ、声をあげることができない子どもたちの心の声を聴く姿勢が大人に求められ、お互いを思いやる温かさがより重要になっているのだと思います。

こういったコロナ禍ではありますが、私たち職員一同は、これまでと変わらず、療育を通じて、子どもたちの笑顔を守っていきたくと考えています。そして、子どもたちがみせてくれる笑顔がわれわれの活力の源です。こうしたことをこれからも大切にしていきます。

最後に、今後とも地域の皆さまを始め、関係機関の皆さまからのご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い致します。センターだよりのご感想をお聞かせいただけたら大変ありがたく存じます。

※WHOが推奨する感染予防策の1つで、物理的に一定の距離を保つことで、コロナウイルスなどに感染することを防ぐ効果があるとされています。

見て理解すること…視覚認知について

作業療法士 近藤 久美

はじめに

作業療法士の近藤久美です。令和2年4月から北部地域療育センターで勤務しております。よろしくお願いいたします。

今回は、見て理解すること…視覚認知の発達の話です。ところで、お子さんが何か上手くやれないときに「よく見て!」と声掛けすることはありませんか?よく見れば出来るとお考えでしょうか?また、発達障害児は耳から入る情報の処理は苦手だけれど、視覚情報の処理は得

意だと考えていませんか？果たして、これらは正しいのでしょうか？

今回の目的は、視覚の役割やその障害をご理解いただくことと、視覚情報処理の苦手に対する対処法を少しではありますがお伝えすることです。

視覚の役割 ～ 子どもの苦手を理解する

発達障害児はただの言葉遅れではありません。上手く話せないだけでなく、話し言葉を聞いて理解することも苦手な場合が多いと気付いていらっしゃる方も多いことでしょう。「喋れるようになればかんしゃくは収まるはず～」と言われたこともあります。果たして本当でしょうか？

何が原因でかんしゃくを起こしているのかを理解することは簡単ではないと私は思っています。発達障害には見て理解することや運動機能・身体感覚機能に苦手さがある場合もあり、様々な不適応状態が発生して来ることがあります。

「虫を集めて大量に殺す」お子さん、私が調べたら、視機能にある苦手が発見されました。「ひどくふざけて、指示に従わない」お子さんは、とても不器用で思う通りできないので誤魔化していたのでした。お二人とも言語指示はよく理解しているお子さんでした。このお子さんたちは私が見る限り、真の原因は言葉の理解の問題ではないのです。しかし、言語理解の悪い子だと判断されることもあったようです。

人は自分が何かを見ている・そしてそこからたくさんの情報を得ているということについては意識が薄いというか、当たり前すぎて「見えることの有り難さ」に気づいていないようなところがあります。しかし、歯磨きや洗面をして服を着替え、食事をしてどこかに出かける、毎日なにげなくしていることも、人は日々視覚に大変お世話になっています。見ることのほかに、耳で聞く、おいで知る、手で触って理解する、味わってわかるなどの方法もありますが、日常の行動の多くは目からの情報に大きくたよっています。

たとえば「歩く」ということを考えてみましょう。家の中で両目を閉じて居間からトイレに行くとしみます。まっすぐドアまで行ったつもりでも、すぐにはドアノブが握れないでしょう。廊下を歩いているとき前に誰かが立っていたらぶつかってしまうかもしれません。このように行きたいところへ行くことも難しいし、だいいち危険です。「歩く」ということで、目の力を借りて、自分の位置を確かめながら歩いているということなのです。

もうひとつ、子どもの見る力を考えるとき、たいいてい大人は大きな誤解をしていると思います。子どもは赤ちゃんの時から大人のように「見えて、そして理解する」わけではありません。そこまでは何とかご理解いただけるのですが、子どもがある程度話せるようになると、大人は自分と同じくらい「見て理解している」と考えがちです。しかし、そうではありません。小学生や中学生の視覚認知能力もまだまだ大人のそれにはおよびません。ましてや、幼児は奥行きや高さの認識・空間における位置関係の理解・動きやその方向および速度の理解はかなり未熟です。そして発達障害児の中にも視覚情報を取り込むことに苦手を持つお子さんがかなりの確率でいらっしゃる事が分かってきています。文字や数字など平面の視覚情報は得意でも、奥行きや高さの認識・動きの方向やスピードの理解は苦手であったりするので、簡単に言えば、食事において幼い子どもや発達に遅れがある子がこぼすのは当然で、「こぼすな！」と要求することは、無理な注文というものです。

見て理解する力を伸ばすには

もちろん、いつまでもこぼしてよいということではありません。どうすればよいのでしょうか。手の操作能力の発達も必要ですがそれについては西部地域療育センターだよりの40号や34号の中で述べましたので、そちらをご覧ください。ここでは「見て理解すること」を中心に述べたいと思います。

ポイントの一つは子どもがおもちゃで遊ぶかどうかです。視覚認知が発達すると、子どもは視覚情報に誘われておもちゃに手を伸ばします。初めは振ったりぶつけたりして音を出すかもしれません。大人がやって見せたことのみねをするようなら、そこまでの理解はあるということになります。まねも大切で、スプーンや箸などの使い方を覚えるということは、レベルは違いますが、まねることを利用した学習です。相応な時期に子どもがおもちゃで遊ぶようであれば、とりあえず視覚認知は順調に発達しているといえます。

もうひとつのポイントは、子どもが「自分でやる！」と手を出してくるかかどうかです。

大人がやって見せたことに誘われて子どもが「自分でやる」という意欲を見せたら、今度は子どもがやる様子を大人が見守りましょう。子どもは「やってみて理解」します。初めは大人のようにうまくやれなくても、そのうち上手になってゆきます。食事なら食べこぼしに注目し過ぎないで、自分で食べることを勇気付けま

しょう。「お母さん(お父さんや先生)がやるのは見た→自分もできると思う→自分でやる!→やってみたら、食べることができたよ→これでいいんだね。やり方がわかったよ。→自分はできる!→次も自分でやる」とうまくつながってゆくことが大切です。

「目と手の協調」という言葉があります。手を使ってできることが目の能力すなわち「見て理解する」能力の発達にも大きく関係しています。道具操作が可能になれば、視覚認知や「目と手の協調」の発達のチェックも容易です。それほどこぼさずスプーンが使えるようになり、お箸の使い方を覚え、絵や字をかくようになってゆくのであれば、「視覚認知」も順調に発達しているといえます。

お子さんに「よく見て!」と声掛けするときに、お子さんに声掛けで見ることを促すだけではなく、大人も子どもが見やすくなる配慮をしましょう。例えば、①見やすい向きに提示する、②見やすい高さに提示する、③姿勢が安定するよう工夫する…などです。注目するまで待つ、ゆっくりやってみせる事が有効な子もいます。



①について、字や絵を書(描)かせるときに紙の面を斜めにならないようにお子さんの方にきちんと向ける(斜面台を使う)などです。パイパイの手が裏向きになるタイプのお子さんには何か見本をやって見せるときには横に並んでお子さんがやる時と見え方が同じになるようにします。②は高すぎたり低すぎると注目が困難なお子さん向き、肢体不自由の子、知的障害の子、不器用を合併した発達障害児にその可能性があります。③は走ることができる発達障害児から重症心身障害児まで障害のあるお子さんほとんどすべてに共通する対応です。重症心身障害児なら横たわった姿勢が一番視覚を使いやすいとも言われています。(眼球が付いている頭が床上で安定するから) 肢体不自由や重症心

身障害の子に座位保持装置のついた椅子が必要なのもこのためです。体幹や頭が安定すると感覚情報を受けとめやすくなるのです。走り回ってばかりいる発達障害児も身体を安定させることは苦手な場合が多く、落ち着いて何かに注目することは苦手です。多動の子にも姿勢を安定させる配慮が必要です。



作業療法では視覚認知能力の向上のための特別なトレーニングをしております。しかし、子どもの見る力を伸ばすことは豊かな遊びの中で作業療法士でなくてもできると思います。園庭やホールにダンボールや木材などの材料を使って大きな遊び基地を作るなどどうでしょうか?よじ登ったり、滑り降りたり、跨いだり、潜ったり、揺れたりできるそういう秘密基地で遊ぶことだけではなく作ること自体もとても良い遊びになると思います。(ただし、安全に配慮しましょう。)先生の指示に従う、友達と協力する、自分は何ができるか考える、みんなで何ができるか考える、…なんて要素も入ります。子どもを支援する(または育てる)大人は、当たり前の生活や遊びの中で見る力を伸ばすことを考えていただきたいと思います。パズルやマッチングなどのお勉強だけでは見る力は伸びません。必ず限界が来ます。

まとめ

身の回りのことをするときや歩いたりして移動するときにも、「見て理解すること」すなわち「視覚認知」がいかに大切な役割を果たしているか、理解していただけただけでしょうか。子どもは、言葉の理解の発達と同様に、「目と手の協調動作」や「視覚認知」も長い時間をかけて発達させてゆくのだということも理解していただけたでしょうか。視覚認知を発達させるためにも、①大人がやって見せる（見本の見せ方は工夫しま

しょう）②子どもの「自分でやる」という気持ちを尊重する③自分でやることを「勇気付ける」を試してみてください。

資料

- 1) 西部地域療育センターだより40号「就学支援の作業療法 不器用へのアプローチ」
- 2) 西部地域療育センターだより34号「幼児期の発達を支援するために—それぞれの立場から」

『きく』ということ

心理担当 佐野 康治

普段の生活の中の会話では、私たちは何気なく相手の人の話を聞いていますが、気づかない間に生ずる話の意図や理解のズレ、相手の人の話はどういう意味だったのだろうなどと感じることはないでしょうか。また、自分が大切な事を一所懸命に話しているのに相手の人にわかってもらえない、思ったように表現できず考えや気持ちが伝わっているかどうか疑問が残る、あの時に自分が話したことが違う形で周りの人に伝わってしまったといったことを経験しているかもしれません。

ここでは日常生活における会話に留まらず、相手の人が何か大事なことや悩んでいることを話してくれた時にどのように聴けるとよいのかも含めて、心理カウンセリングの手法も取り入れながら紹介してもらい、これからの生活の中で少しでも活かしてもらえればと思います。

聴く時の気構え(体の構え・心の構え)

話を聴くというのは基本的には言語でのやりとりになりますが、生活の中で経験されているように人と人が話す時には「言葉」のみではなく、聴く側の人の顔の表情や態度が影響してきます。一説には、コミュニケーションの中で「言葉」そのものは10%程度しか使われておらず、約40%が音調(声の調子)、残りの約50%は視覚(表情、ジェスチャー、姿勢など)からコミュニケーションを取っているということです。

まずは「体の構え」ですが、話を聴く時には、話し手との体の距離や向きなどを調整し、両足をしっかりと床につけて腰を落として(肚を据えて)座ることにより、聴く準備ができたことを伝えます。

例えば、聴き手が腕組みをしていたり足を組んで椅子

にもたれていたりすれば話し手は受け容れられていないのではと感じるかもしれませんし、一所懸命に聴こうと前に乗り出し過ぎればプレッシャーを感じるかもしれません。小さな子どもと接するときには、大人側が腰をかかめて目の高さを合わせてほほ笑むなどの心配りがあるとよいかもしれません。

話の最初の段階で、緊張や不安などで話し手の言葉の表現が滞っている時、迷いや躊躇

が見られる時には、焦らずに相手の人の仕草に似た動作をしたり、呼吸のリズムを合わせたりして待つなどにより安心してもらえることがあります。

そうした中で聴き手として注意したいことは、聴き手の心の動きが無意識に体の動きに出てしまうことがあるということです。顔つきが単純になる、自分の価値観とは違う内容で肩が張って来る、自分に対する否定的表現とも取れる内容により眉間にしわが寄る、時間が気になり集中が切れてソワソワするなどが考えられます。

次に「心の構え」についてですが、「傾聴」をキーワードに考えてみたいと思います。人の話(思い)を親身になって聴くということは普段の生活の中では難しいこともあるかもしれませんが、家族でも友人との間でも時に求められる場面が出てきます。

そうした時には、話を聴きながらも、『そのような考

